

近世公家墓所の一例——摂関家鷹司家の墓所——

藤井直正

一、はしがき

近年における考古学の著しい動向の一つとして、中世から近世へかけての、いわゆる歴史考古学の中でも、新しい時代を対象とする遺物の調査・研究をあげることができる。

中でも、遺跡としては、城館をはじめとして、さらに都市全体を遺跡として取り上げる調査・研究、遺物の上では、これらの遺跡にあつて遺存率がもつとも高く、数量的に見ても普遍的な土器・陶磁器の研究を筆頭に、個々の遺物、あるいはそのセツト関係を通じて、当時の生活・文化、さらに社会構造を考えようという試みが全国各地で活ぱつに進められている。

こうした都市遺跡の調査と関連して、当時、死者を葬った墓・墓地が検出される場合も多く、各地でさまざまな事例が報告されている。生があれば死が訪れるのは当然の理である。古今東西、死者を弔う祭式の方法、埋葬のあり方はちがっても、さまざまな形の墓が存在しているものであり、当時の社会のあり方を端的に示すものとして、考古学的重要な研究対象として取り上げられて来た。

昨今においても、佐賀県神埼郡三田川町・神埼町にまたがる吉野カ里遺跡で見つかった墳丘墓や、奈良県桜井市の纏向石塚の発掘は、『魏志倭人伝』の記載や耶馬台国の所在論ともかわつて、考古学関係者ばかりでなく、多くの人びとの関心を集めているのである。

しかし、その反面、中世における大規模な墓地として、その調査成果が大きな反響を呼んだ、神奈川県横浜市上行寺東遺跡⁽¹⁾や、静岡県磐

田市に所在する一の谷遺跡の墳墓群が、調査関係者をはじめ、学界有識者の保存への努力も空しく、現代における都市開発のために破壊されるという事態も生じているのである。⁽²⁾

発掘調査による墓地・墓制の調査・研究とは別に、中世・近世という時代を視点をかえて見た場合、全国の各地には、調査・研究の対象として取り上げる必要のあるものが随所に存在しているのである。集落の中にあるもの、寺院の境内にあるもの等、その形はさまざまであるが、墓碑・墓塔、それらの集合する墓地がそれである。

これらの墓碑・墓塔乃至墓地は、民俗学の立場から、あるいは石造美術としての見地から研究対象とされる場合が多いが、考古学の研究対象とされたものは少ない。かつて故坪井良平先生が、現在の京都府相楽郡木津町に所在する中世以来の墓地を対象に、個々の墓碑を単念に実測され、それを年代順に並べる、いわゆる編年の作業を試み、墓碑・墓地の変遷を通じて集落の推移をたどられた「山城木津惣墓の研究」(『考古学』第一〇巻、第一六号、昭和二四年)は、この分野の研究の金字塔であるが、こうした試みの実践は、古い集落乃至墓地をめぐる土地環境の変化がめまぐるしい現在こそ必要ではないのだろうか。⁽³⁾

私は私なりに、一つの視点から、一大名家の墓所を対象とした調査の一端を紹介したのが、『大手前女子大学論集』第二十一号(昭和六二年一月)に掲載した、「大名家墓所の一例―近江膳所藩主本多家の墓所」である。城下町には、必ずといっていい程、当地を治めた城主の墓所がその菩提寺に所在している。ここで取り上げたのは、小藩ではあるが、東海道を扼す近江膳所藩主本多家の墓所であり、大津市丸の内町の緑心寺にある。

また、その姉妹編として、膳所藩の分家に当たり、本多忠統^{ただむね}にはじまる伊勢神戸藩主^{かんべ}本多家の墓所も調査し、それは「本多家の遺蹟」(若林喜三郎編『旧伊勢神戸藩主本多家史料』大手前女子大学史学研究所、昭和六三年三月)に紹介した。

ところで、今回、本稿において取り上げたのは、近世幕藩体制下にあつて、大名家に比べると、その存在が忘れがちな、といつても古い伝統に支えられて、それなりの勢力を持っていた公家の墓所であり、京都市右京区嵯峨二尊院にある鷹司家墓所がその対象である。

実地調査を試みたのは、昭和五十二年のことであつたが、そのころ鷹司家のことについてしらべる必要があり、鷹司家の成り立ちに関する史料と史跡の探訪を試みた。その動機は、私の自宅から日日眺めることのできる、岩滝山のふもとに所在する古刹往生院の歴史とのつな

がりからである。

この往生院は、寺伝では聖武天皇の勅願によって行基が開創したと称しているが、それは後世の付会の説で、この寺の草創は、三善為康の著わした『拾遺往生傳』にのせる「安助上人傳」によって、平安時代の長暦年中（一〇三七—四〇）に、安助上人が四天王寺の真東に当たる当地（現在の東大阪市六万寺町）の山ろくに、浄土信仰の道場として開かれた寺院跡である。⁽⁴⁾のち南北朝時代の正平三年（一三四八）のいわゆる四条縄手の合戦に際し、楠木正行の率いる南軍が、当寺を本拠としたことが『太平記』等に見えているが、⁽⁵⁾この時の兵火で焼失、衰微していた。

江戸時代に入って、河内郡池島村（現在の東大阪市池島町）の富家^{ふけ}浄泉坊欣誉が、時の関白鷹司信房及び房輔の援助を受けて再興したと伝えられているのである。⁽⁶⁾

往生院の歴史をしらべるに当たって、もし鷹司家の史料がのこっているのであれば、その中に往生院とつながりのある史料があるのではないかという推測に立つて、鷹司家史料の探究を試みたのである。

件の鷹司家は、京都市上京区の京都御所の堺町御門前に屋敷があったのであるが、幕末に火災に遭ったということであり、明治維新後、東京に移住された等の事情から、鷹司家に伝えられていた古文書・記録の類はほとんど失われているが、若干の史料が宮内庁書陵部に収められていることを伝聞した。

こうした経緯もあって、宮内庁書陵部に赴き、鷹司家史料を閲覧したが、それは全部が鷹司家ご当主の日記であり、当然のことではあるが、河内の一介の小寺院のことが出てくるはずはなく、徒勞に終わったが、後章にくわしく述べる葬送に関する記事を見つけたことは、まったくの副産物であった。

今回、先に記したような視点から見た場合、当時しらべておいた資料が役立つことから、再検討を加えて取り上げて見ることにした。

いうまでもなく、鷹司家は摂関家の一であるが、その筆頭であり、本家筋に当たる近衛家は、昭和六十一年以来、本学の事業として私たちが発掘調査を進めている伊丹郷町の領主であり、本学ならびに私たちにとって身近な存在である。従って、京都市上京区の大徳寺に所在する近衛家墓所の調査も、近い機会に実施して見たいというのが、私の脳裡に秘めている課題でもある。

近世公家墓所の一例

本稿は、先ず、嵯峨二尊院にある鷹司家墓所の状況を紹介し、先年、宮内庁書陵部に出向いた際に閲覧した『鷹司房熙記』に見える先代兼熙の葬礼に関する記事を中心に述べることにする。そのあと前稿以後、機会のあるごとにべつ見した近世墓地、墓碑についての覚書を記し、前稿の補填をすることにした。

〔注〕

- (1) 「神奈川六浦と上行寺東遺跡」(『歴史手帖』(第一四卷、第三号。昭和六一年三月、名著出版)
- (2) 網野善彦・石井 進編『中世の都市と墳墓―の谷遺跡をめぐって』(昭和六三年八月、日本エディタースクール出版部)
- (3) 畏友水野正好氏は、自ら編集に従事した『図説発掘が語る日本史4近畿編』(昭和六〇年十二月、新人物往来社)所収の「主要文献解題」の中で、「惣墓の墓標三二〇〇余基を調査し、墓標の変遷、思惟の移りを鮮かに説き、歴史考古学の真髓を披瀝する。後続する同種の論考がいまだ五指に達しないことが残念である。」と評している。
- (4) 川岸宏教氏「中世枚岡の仏教」(『枚岡市史』第一巻、本編所収、昭和四二年)
- (5) 『太平記』巻第二六「正行参「吉野」事」
- (6) (4)に同じ

二 五摂家の一―鷹司家

鷹司家のことを知るに当たって、まず『日本歴史大辞典』（河出書房、昭和四九年刊）を引いてみた。「たかつかさけ」、次に「たかつかさけりよう」の項目があり、以下、

たかつかさすけひろ 鷹司輔熙

〃 ただふゆ 〃 忠冬

〃 のぶひさ 〃 信尚

〃 のぶふさ 〃 信房

〃 ふさひら 〃 房平

〃 ふゆのり 〃 冬家

〃 ふゆみち 〃 冬通

〃 まさひら 〃 政平

〃 まさみち 〃 正通

〃 もとただ 〃 基忠

〃 もろひら 〃 師平

の、歴代二十六人のうち、十一人についての解説が掲載されている。冒頭の「鷹司家」とこの十一人のうち、輔熙・政通をのぞいた九人の解説は、本学文学部長、史学科教授今井林太郎先生が執筆されている。

ここで鷹司家についての記事を引用させていただく。

鷹司家 五摂家の一つ。姓は藤原氏、近衛家実の四男で、兼経の弟である兼平を祖とする。兼平の亭が鷹司室町にあったので、鷹司

近世公家墓所の一例

近世公家墓所の一例

氏を称した。兼平は一二五二（建長四）年一〇月兼経のあとを承けて摂政となり、ついで五四年一二月関白となった。以後彼の子孫は相次いで摂政・関白となり、明治時代に入って熙通は華族に列し、公爵を授けられた。その系図を示せば次のごとくである。



兼熙——房熙——尚輔——基輔——輔平——政熙——政通——輔熙——輔政——熙通——信輔

さて、鷹司家は、楊梅家とも呼ばれ、五摂家の一つとして摂関家に数えられている家柄である。摂関家のはじまりは、清和天皇の代に、天皇の外祖父として大きな勢力を持つことになった藤原良房が、摂政に任命された時からである。以来、藤原氏北家が代々世襲し、藤原道長の時代に最盛期を迎えた。鎌倉時代に入って、近衛家と九条家、及びそれらの流れを汲む二条家・一条家、さらに鷹司家の五家が交互に摂政・関白となり、五摂家と呼ばれるようになった。

五摂家の一つである鷹司家は、摂政であった近衛兼経（近衛家）の時、嗣子の基平が幼少であったために、弟の兼平に譲ったことにはじまる。そして、この兼平の邸宅が鷹司室町（現在の京都市上京区）にあったことから鷹司氏と称するようになった。

近衛兼平は、建長四年（一二五二）十月に摂政となり、次いで建長六年（一二五四）十二月に関白となった。この時から、その子孫は、他の摂関家と交互に摂政・関白の地位についた。室町時代になると、一条兼良と並ぶ文才といわれる房平を出した。しかし、室町時代末期となって、十二代の忠冬には嗣子がなく、約三十年の間鷹司家は中絶した。

その後、天正七年（一五七九）、織田信長の口添えによって、二条晴良の三男である信房がその後を嗣ぎ、同年十一月二十二日に正五位に叙せられ、さらに江戸時代に入った慶長十一年（一六〇六）に関白となり、鷹司家を再興したのである。従って、この時以後は幕末に至るまで鷹司家を継承した。二十一代には、閑院宮直仁親王の御子輔平が降下されて継ぎ関白となっている。

幕末にあつては、政通・輔熙の父子が、公武にわたる多難な政局下にあつて活躍し、国事に尽くされている。すなわち、政通は、弘化三

年（一八四六）、孝明天皇のご即位に伴って摂政となり、ペリーの来航以来、朝廷と幕府の中に立って交渉に当たられ、安政五年（一八五八）、幕末が日米通商条約の調印を求めた時には、開国論の立場に立って幕府の方針を認めようとされた。しかし、その後は攘夷論に変わり、近衛忠熙・三条實萬等と協力し、その時の関白九条尚忠等に対抗した。安政の大獄の時には、水戸家と内通しているのではないかと疑われ、子の輔熙とともに、幕府から落飾を命じられるという一場面もあった。

また政通は、家蔵の書籍の整理に当たられているが、これらの蔵書は、現在、宮内庁書陵部の所蔵となっている。明治時代になって熙通は華族に列して公爵を授けられ、大正天皇の時代には侍従長をつとめられたこともあった。熙通の子が鷹司平通氏であり、ながく東京都中央区万世橋にある鉄道博物館長を勤められていた。その令室が、昭和天皇の第三皇女孝宮であり、昭和天皇のご大喪の直後の五月に薨去されたことは記憶に新しい。

最後に鷹司家の所領についてみると、その中心となっているのは、近衛家から分与されたものと考えられる。兼平は永仁二年（一二九四）八月に逝去したが、その前年にしたためた家領の処分状がある。これを表示すると次の通りである。

家領荘園の名称	
今泉荘	
棕橋荘	
網代荘内御名	
大観寺領乙生遺領	
小代荘	
宇多院	
弘見荘	

近世公家墓所の一例

青島莊
饗庭莊
高岡莊
揖賀莊
揖深莊
上有智莊
細河莊
東三条勅賜田
赤馬莊
衣比須島
酒井莊

上記の家領が分領されている。この他にも多少の家領・家地があったものと推測することができる。荘園制が崩壊し石高知行制になると、他の摂関家と同様に、織田・豊臣の各政権、さらに徳川幕府から知行地を与えられていた。因みに江戸時代末期における石高は約一五〇〇石であった。

三 鷹司家の墓所

鷹司家の墓所は、くわしくその所在地を明示すると、京都市右京区嵯峨二尊院前長神町にある(第1図)。手近かにある、故川勝政太郎先生著の『京都古寺巡礼』(現代教養文庫、社会思想社、昭和三九年)を見ると、二尊院の歴史について次のように簡潔に述べられている。

もとここには平安時代に華台寺という天台の古寺があったが、いつか荒廃していた。鎌倉中期近くにこれを法然上人の高弟正信房湛

空上人が中興して二尊院とし、法然上人を開山に拝して、自分は第二世となった。本堂内陣の厨子には釈迦如来・阿弥陀如来の二立像がまつられている。鷹ヶ峰の遣迎院と同様に、発遣の釈迦と来迎の弥陀である。このような事情で二尊院は天台・律・法相・浄土の四宗兼学であつたが、浄土宗を本体とした。明治維新の後に天台宗延暦寺に属することになったのである。(以下、略)

小倉山を背にした宮殿風の本堂の右手に、瓦葺の弁財天堂が建ち、その横から山腹にかけて一筋の長い石段がある。この石段の右手、すなわち北側は、三〇四段の平地が開かれて墓地となっているが、ここに記す鷹司家をはじめ、九条家・二条家・西三条家等名家の墓が多く立ち並んでいる。墓地北端の道を登りつめたところには、嵯峨・土御門・後奈良三帝の石塔と伝える、鎌倉時代の層塔・五重塔・宝篋印塔が北から南に並んで建っていて、墓地そのものの古さを物語っている。

さて、石段を登りつめると正面に宝形造の建物がある。一種の廟建築で廟内には花崗岩製の大きな石壇があり、中央に「空公行状」の題額のある立派な石碑が立っている。銘文によつて、二尊院を再興し、建長五年(一二五三)七月二十三日に示寂した湛空上人の碑であることがわかるが、いつのころからか、法然上人円空大師廟とされている。⁽¹⁾

鷹司家の墓所は、当寺の墓地の中では最上段、『空公行状碑』のまつられている廟前を北へ進んだところにひろがっている(第3図)。

京都を対象とする近世の地誌は数多く刊行されているが、その一つ『雍州府志』陵墓門を見ると、

○鷹司殿塔 信房公以下多在二同院一

とある。また、『山城名跡巡行志』巻四には、

○小倉山二尊院 華臺 在二同山麓一、四宗兼學

天台 眞言
律 浄土 (下略)

○鷹司家ノ靈屋 在佛
殿北

等の記述がある。

墓塔の数は、現在のところ正確に数えていないが、年代の古いもの、新しいもの、当主、それが側室等のものを合わせると五十〜六十基に及ぶ墓域で、大まかに見て四〜五の区域に分けることができる。

近世公家墓所の一例

東面する山腹を開いて造成されたと考えられるが、その中心となっている区域は、約十メートル四方の広さで、ここに計二十四基の墓塔が集中している。それぞれ方形の基壇がつくられ、その上に宝篋印塔形、又は五輪塔形の墓碑がのっている。数からみると宝篋印塔形式の方が多い。墓塔の大きさは、七〇〜八〇センチ前後をはかり、一メートルをこえるものは少ない。この時代の大名墓所の規模や、墓塔の大きさとくらべると比較にならないほどつましやかなものであるが、それは当時における公家社会の経済状況を反映しているであろう。墓塔の用材はいずれも砂岩で、小形であっても、よく見ると、細工はすぐれていて、京都という土地柄でもあり、古くからの伝統と技術をもった石匠に発注され、その手に成る造作であることを物語っている。

この墓域の中で、年代的にもっとも古いものは、明暦三年（一六五七）に没した鷹司信房の墓塔で、総高七六センチの宝篋印塔であるが、塔身の正面に、

明暦三年

後法音院

十二月

の刻銘がある（第4図上）。墓域全体を見わたしてもこれより古い時期の墓塔はない。従って、現在見ることでできる鷹司家の墓所がここにつくられたのは、鷹司家を中興したと伝えられている信房の代であったということが考えられるのである。

各墓塔の向きはまちまちで、南面するものも、東面するもの、北面するもの、に分かれるが、西面するものがないのは、西側が山の斜面であることから、墓塔の向きについてはとくにきまりがなかったようである。

この区域の中心、やや南寄りに、一辺一、九メートルの南面する宝形造・棧瓦葺の小さい建物がある。屋根中央に置かれていたはずの露盤が失われたり、瓦もずれ、天井板がはがれたり等、かなり荒廃しているが、南面をあげ東（第6図）・西・北の三面を五輪塔形の板を内側と外側に二枚合わせて各面五枚ずつ並べて壁板にした、小規模ではあるが霊屋の形をのこしている。北面内側の塔婆板には、仏像が彩色で描かれていたようであるが、剝落がはげしい。この中に総高一二四センチの花崗岩製の宝篋印塔がまつられている。霊屋があつたため、石肌の保存がよく原形をとどめた美しい石塔である。塔身に、

元禄十三年^{庚辰}年

後景皓院

正月十一日

の刻銘があり、元禄十三年（一七〇〇）に没した後景皓院、すなわち鷹司房輔の墓塔であることがわかる。

現在の鷹司家墓所で現存する霊屋はこれ一つであり、貴重な遺構であるが、この墓域の中には、同じ位の規模の石壇をもつものがあり、造立時にはそれぞれ霊屋がつくられていたのかもしれない。⁽²⁾

この方形の区画から南へ約五メートル張り出した長方形の一角がある。南北約二、五メートル、側面約三、五メートル、正面中央に扉をつけた石柵をめぐらし、奥寄りに三段の台座をふくめて、総高二七メートルの宝篋印塔形式の墓塔がある。塔身の正面（東西）に、

延寶七^{己未}年

高政院

十一月八日

背面（西面）には、

鷹司攝政關白房輔公

室北政所從三位竹子者十州大守

毛利右馬頭大江朝臣元就之曾孫

羽村秀就朝臣息女也

延寶七年十一月八日

と刻まれていて、房輔の室であり兼熙の母である「高政院」の墓塔であることがわかる（第5図上）。夫の房輔公は先に記した霊屋のある墓塔がそれであるが、それに先立つこと二十一年の延宝七年（一六七九）に没した奥方の墓塔との差は余りにも大きい。

ちょうどこれと対比する位置に、葵紋の入った石扉に石柵をめぐらした特異な形式の大きな墓塔がある。正面（東西）に、

近世公家墓所の一例

享保四^乙亥年

願證院

四月二十六日

背面（西面）にまわると、

鷹司前關白正一位兼熙公

政所從三位長子者

東照權現家康之曾孫

父者讃陽城主從四位上

近衛權少將源頼重媛□

と刻まれている。兼熙の正室「願證院」の墓塔で彼女は徳川家康の曾孫に当たり、讃岐高松に封じられた家康の孫松平頼重の息女であったことがわかる（第5図下）。

この二つの墓塔の銘文から読みとれることは、摂関家と徳川家、あるいは毛利家と言った大名家との縁組は、諸家の系図や当時の記録によつてわかることがあるが、墓塔に刻まれている銘文は、より明白にそれを伝えていることである。また嫁先のご当主（ここでは鷹司家の墓塔が小さいのに対して、ここに見られる二基の墓塔の主は、一方は毛利元就、一方は徳川家康の、どちらもその曾孫に当たる女性であり、それを反映してか、墓塔の大きさ、墓所の規模、それにまわりの荘厳にしても雲泥の差が見られ、徳川家・毛利家の権威が他を威圧しているのである。同じところに葬られたご夫妻は、この地下でどのような心情を抱いておられるのであろうか。

「高政院」墓塔の前には、明治十一年没の「鷹司輔熙公墓」と「藤原崇子墓」が後につくられている。

以上くわしく述べた中央の墓域から石段を登った奥まったところに、これも明治になって造立された石柵をめぐる墓塔が二基並んでいる。

ここからさらに北方に行くと、「願證院」塔の右側に石段が設けられ、その上に一つの区域がある。ここにまつられている墓塔はいずれも

明治時代以後のもので、墓地そのものが新しく拡張・造営されたことがわかる。また、石段を登らずに、進んだ奥まったところには、十数基の墓塔の並ぶ一かくがある。まだくわしくしらべてないが、各代の正室・側室の葬られている墓所のようなのである。

なお、各墓塔については、大ざっぱなものであるが一覧表を作成して見た。

現在見ることのできる鷹司家墓所の概況は以上の通りであるが、すでに述べたように当墓所でもっとも古い墓塔は、明暦三年に薨去した鷹司信房のそれである。信房は二条晴良の男で忠冬の養子となつて、一時途絶えていた鷹司家を再興した人とされているが、この代に当墓所が造成・整備されたことを物語っているのかも知れない。

しかし、そうだとした場合、信房以前、鷹司家を立てた兼平以後、十一代に亘る方がたの墓所はどこに所在しているのだろうか。何冊かの書物を見ても、鷹司家墓所は二尊院であることを記しているが、他の場所での所在を記したものはない。

ここで一つ気にかかることは、南北にひろがる墓所全体のほぼ中央、新しい時期の墓所へ登る石段のすぐ右手に立っている九重層塔である。もともとこの位置に立てられていたものか、いつかの時代に現在の位置に移されて来たものかはわからないが、立派な石壇の上に立つ総高二メートルばかりの層塔でその様式から近世初頭の造立であることがわかる。

中世の惣墓においては、その中央に層塔の立てられている場合をよく見かけるが、先に記したことから、鷹司家を中興した信房の代に墓所が整備され、その時に先代の墓所をこの場所に改葬し、その供養のためにこの層塔が造立されたものかも知れないということが考えられるが、現在のところでは推測にすぎず、断定の限りではない。

(1) これを最初に注意されたのは川勝政太郎先生である(『京都の石造美術』木耳社、昭和四七年)。また、銘文は、川勝政太郎・佐々木利三両氏著の『京都古銘聚記』(スズカケ出版部、昭和十六年)に収録されている。古碑の遺例が少なく、また鎌倉時代造立であることのわかる稀有の石碑として貴重であるが、石造美術として紹介されているに過ぎない。

この「空公行状碑」については、私の旧稿「碑碣の源流とその伝播」(『大手前女子大学論集』第一四号、昭和五五年)で言及した。

(2) 本文中で紹介した『山城名跡巡行志』に、「鷹司家ノ靈屋殿北」と記しているのは、墓所のことを記しているのか、その墓所に靈屋があったことを記しているか明らかではないが少し気にかかる表現である。

付記一 ここで鷹司家墓所における霊屋についての史料を紹介しておきたい。

宮内庁書陵部架蔵の『鷹司家史料』のうち『鷹司政通記草』文政十年（一八二七）七月二六日の記事である。まず、

廿六日 晴於小倉山二尊院今度母堂霊屋建立

上棟之

棟板染筆 刑部大輔俊賢

書之

明文 源惟明

と記されていて、政通の母堂の霊屋が造立されているのである。はっきりと「上棟」の字句があるから、建造物であったことは確かである。記事はつづいて、二十九日のところで墓所での法会のこと記され、さらに、

一 今日霊屋造宮了依之開眼供養三間^二二間半小堂此上^三有銅作風形^{宇治殿形模之了}

とあるから、この霊屋が三間に二間半の規模で屋根に銅製の宇治形・宇治殿を模した風形（露盤または鴟尾か）をのせていたという。あるいは鳳凰であったかも知れない。

こうしたことからみると、各代の墓塔の上には造立当時にあつては霊屋が設けられていたと考えることができるのである。

付記二 この稿の校正中、寺田貞次氏著の大作『京都名家墳墓録』（大正十一年、複製版が昭和五十一年に東京・村田書店から刊行されている）によつて、京都市右京区にある名利高山寺に近い向山に鷹司家墓塋のあることがわかった。同書には、鷹司兼平墓のことがくわしく記され、また『高山寺過去帳』によつてその子基忠の墓も同じ場所にあるはずであることと、古塔四基許があること、しかし無銘で識別できない、といったことが記されている。近い機会に現地へ赴き、調査を果たしたいと思う。

四、『鷹司房熙記』に見える葬送の記事

宮内庁書陵部には、鷹司家関係のものとして、次の史料が架蔵されている。

名 称	年 代	冊数	分類番号
鷹司房輔記	延宝三	一	鷹 749
鷹司房熙記	享保十一—十五	四	鷹 611
鷹司房熙記	享保十三—十四	四	鷹 681
鷹司政通記	文化五—文政十一別記共	二四	鷹 682
鷹司政通記草	文化十五—弘化三	一六	鷹 720
鷹司家記	天保五—文久二	一九	鷹 721
鷹司輔政記	元治元—慶応三	一一	鷹 742

私がこれらの史料を閲覧するため、皇居内にある宮内庁書陵部を訪問したのは、昭和五十二年五月二日のことであつた。当時皇室制度調査官として宮内庁に勤務されていた今江広道氏（現在、国学院大学文学部教授）が、私の母校である大阪府立生野中学校（現在の大阪府立生野高等学校）地歴部の先輩であり、そのころから知己を得ていた間柄であつて、史料の閲覧に当たっては、とくにおねがいして便宜を計つていただき、その上、懇切なご配慮とご教示を受けた。すでに十余年の歳月を経てしまっているが、ここに御礼を述べておきたい。

先に表示した史料は全部で七十九冊を数え、各々の書冊の装幀に手が加えられ表紙をつけて製本されている。今江氏からお聞きしたところ

近世公家墓所の一例

近世公家墓所の一例

ろによると、これらの史料については、これまで刊本がなく、書庫に収められたままで、これを全部閲覧したのは、当時の私をはじめでたらうということであった。撰関家の中でも、筆頭といわれる近衛家のように、各時代の政治や文化につながりを持った家柄でなく、どちらかといえば目立った存在ではなかった鷹司家ことである。とくに、近世以後の公家についての研究は、専門外の私は寡聞にして知らないが、それほど進んでいないということにも関係があるのである。それにしても、私が拝見した限りでは、ご当主自身の筆で、克明に記された日記の内容は、幕藩体制下にあつて、しかも、『禁中并公家諸法度』というきびしい枠の中で、平安時代以来の伝統を守りつづけて来た公家の生活・文化の様相を生々しく伝えてるように思われるのである。

こうして通読しているうちに偶々出くわしたのが『鷹司房熙記』に見える、先代鷹司兼熙薨去と、その後につづく葬送の記事であるが、まず原文を引用する。

『鷹司房熙記』抜すい（享保十年十一月）

廿日寅

前殿下次第二差詰醫術不相叶亥刻薨去

廿一日卯

五旬喪服著二付職事頭中将隆兼朝臣江以貞祐申遣処新嘗會勤役二付神事之由依之日野西辨江申置新嘗會御神事といへとも届了入之間被露之事勝手次第二頼入之旨申置家傳奏江以後信昭様薨去之段申置三宅院江院号之事以後諸頼申入被仍其意之旨也有隣軒御出止時之備

廿二日辰

廿三日巳

前摂政公江以貞祐申入少々示談之事有之也三寶院殿占院号勘給

登雲院

三寶院殿江以貞祐申入院号之事勘給之處登雲院ハ少シ所存有之候間勘政給候処ニ申入之処其後以文申をく旅宿之事其上院号等之事不案内之間外とも相談致さるやうまとめ候事也

今夜酉刻過入棺ニ尊院誦經

廿四日午

院号之事此方ニ而勘

心空華院

三寶院門跡江以貞祐右院号之事令相談処所存もなく候間可然旨返答也大乗院門跡内府殿江令相談処無所存由之

心空華院ニ定

今夜御身隱酉刻出棺出棺以前有隣軒御出座ニ御供之

廿五日未

廿六日申

廿七日酉

有隣軒御出退付御供

廿八日戌

今日未刻送葬行列ホ別記予辰一點出門午刻斗ニ尊院著付送葬之儀令催先龕前堂ニ而法事聴聞畢火屋ヨリ二町斗前ヨリ轅ニ相從引導畢予焼香法事畢導師伴僧退散其後詣廟前方丈江歸暫時休息申刻斗ニ尊院出酉刻過帰殿

近世公家墓所の一例

近世公家墓所の一例

七ケ日之間法事執行今日申刻開闢也

廿九日豕雨

於二尊院初七日之法事相勒

十二月 朔日子晴

二日丑

詣二尊院今日二七日也法事聴問

有隣軒御出依當主不遊對談

三日寅

四日卯

三七日法事於二尊院執行

五日辰

七ケ日之法事結願也

六日巳

四七日法事於二尊院執行

七日午

艱心院江参入頼行事

八日未

九日申

十日酉

從牧野佐渡守諸大夫一人依扣俊信朝臣ヲ遣大樹ヨリ為弔儀奉書到来

十一日戌

今日五七日之於二尊院法事ニ付予参詣卯半刻今日法事養心院占執行聴聞

十二日亥

十三日子

十四日丑

十五日寅

今日有隣軒御

十六日卯

今日有隣軒江参

十七日辰

十八日巳

六七日法事於二尊院相勤

十九日午

今日左府公占使到来右之口状書別ニ有リ

廿日未大雪

今日心空華院初月忌ニ付佛参今日石塔供養

廿五日子

盡七日法事於二尊院相務入夜前宰相國久公入来只今中納言 勅許ヲ蒙候ニ付為禮也

廿八日卯

今日二尊院長者此間ノ礼トシテ来對面、有隣軒御出・談

近世公家墓所の一例

以上、『鷹司房熙記』の一部であるが、前關白鷹司家兼熙が享保十年（一二二五）の十一月二十日に薨去されたことにはじまり、以後一カ月後の十二月二十日に初月忌（祥月忌）が行われるまでのことが記録されている。これを日付を追って項目別に整理したのが次の表である。

十一月二十日	前殿下（鷹司兼熙）、亥刻（午後十時）
〃 二十一日	三宝院へ院号（戒名）のことをおねがいする
〃 二十二日	三宝院より「登雲院」の院号が下されたが、所存があるので勘え直していただきたい旨を伝える。
〃 二十三日	酉刻（午後六時）入棺、二尊院（の僧）による誦經
〃 二十四日	院号はこちら（鷹司家）で勘えて「心空華院」に定める
〃 二十五日	酉刻（午後六時）出棺
〃 二十六日	未刻（午後一時）送葬の行列
〃 二十七日	房熙公は辰一点（午前七時）より門を出、午刻（午前十一時）午後一時に二尊院に著く
〃 二十八日	先龕前堂で法事を聴聞する
	火屋より二町斗前より轡に相従って引導、焼香、法事
	導師、伴僧が退散されて後、廟前に詣で、方丈に帰って暫く休憩
	申刻（午後三時）五時に二尊院を出、酉刻（午後六時）八時に帰る
	七カ日の間法事を執行、今日の申刻がはじめ

〃	二十九日	二尊院において初七日の法事をつとめる
十二月	一日	
〃	二日	二尊院に詣る、二七日の法事
〃	三日	
〃	四日	三七日の法事を二尊院で執行
〃	五日	七ケ日の法事結願
〃	六日	四七日の法事を二尊院で執行
〃	七日	
〃	八日	
〃	九日	
〃	十日	
〃	十一日	五七日の法事を二尊院で執行
〃	十二日	
〃	十三日	
〃	十四日	
〃	十五日	
〃	十六日	
〃	十七日	
〃	十八日	六七日の法事を二尊院でつとめる
〃	十九日	

七カ日の法事

初月忌で仏参（二尊院へ）石塔供養

〃 二十日
〃 二十一日
〃 二十二日
〃 二十三日
〃 二十四日
〃 二十五日

尽七日（満中院）法事を二尊院でつとめる

まず冒頭に出てくるのが院号についてのことであるが、鷹司家歴代の院号が三宝院に願い出て命名され、下されるしきたりであつたらしいことがわかるが、今回下された院号「登雲院」は、どういう事情があつたのかは明らかではないが、「心空華院」としている。

次に入棺（納棺のことか）は薨去の日より三日経つた二十三日に行われたことが知られるが、翌二十四日に見える「出棺」は何を意味しているのだろうか。これらの儀式は、おそらく鷹司家の邸で行われたと思われるのであるが、明記されていない。

二十八日、葬送の行列は邸を出て二尊院に向かった。「先龕前堂」とあるから、何らかの建物があつたのだろうか。さらに「火屋」という語があることから考えると、遺骸は火葬されたことを物語っている。とすると、鷹司家の歴代の葬法は火葬ということになるが、この語句だけで決めるのは早計であろう。

この日から十二月五日までの七日間にわたって法事が行われ、さらにその上に、初七日から七七（四十九日）までの法事が行われている。現代の感覚・慣習からではちよつと理解しにくいが、公家社会の慣習をしらべて見る必要がある。また、初七日から七七日までの日の設定がまちまちであることも意外である。

こうした行事ののち、十二月二十日、「初月忌」、同時に石塔供養が営まれた。この日記には墓所に棺を埋葬した時が記されていないが、どの時点なのだろうか。これも疑問の一つである。先に指摘した「出棺」の語句が、二尊院の墓地に埋葬するため、葬儀に先立って邸を出たことを意味するのもかも知れない。十一月二十八日の葬儀に当たって、葬送の行列が出るよりも先に、当主である房熙公が邸を出て二尊院

に到着しているという記事からも、出棺と葬列とは同時ではないということが考えられるが、この不自然もこれで解決できるのではないだろうか。

この時代における葬礼のあり方については『徳川実紀』に見られる徳川將軍家の例のほか、大名家あるいは公家の記録を単念に読むことによって知ることができるに相違ない。従来の歴史学乃至歴史家の関心を惹く課題ではなかった、それは当然のことかも知れないが、考古学のプロパーも、民俗学のプロパーも見落として来た、というよりも手をつけていない分野である。

鷹司房熙公ご自身が書きのこし、房熙公をはじめとする一門によって建てられた墓塔が現代に伝えられているのであり、墓地・墓塔を対象とする考古学的方法による近世史へのアプローチが可能なのである。

当の前關白鷹司兼熙公、「心空華院」の墓塔は、前章に述べた墓域の東南隅にあり、総高一〇八センチをはかる宝篋印塔で、塔身に、

心空華院
享保十巳年
十一月廿日

と刻まれ、墓地の一かくに静かに眠っているのである(第4図下)。

五 小 結

以上、近世公家墓所の一例として、京都嵯峨二尊院にある鷹司家墓所を取り上げ、その概要を記した。ごく大ざっぱな現状調査の報告に過ぎないが、それでもいくつかのことがらを明らかにすることができた。折を見て、よりくわしい調査をして補訂する必要がある、合わせて、同じ二尊院にある二条家・九条家、さらに一条家・近衛家と進めて、五摂家の墓所を調査してみたいと思う。

神戸女子大学の田中久夫氏は、最近刊行された『地藏信仰と民俗』(平成元年二月、木耳社)の中で、

平安時代の墓制研究は考古学が行なうべきであろう。しかし、考古学はあまりこのことについて触れるところがない。

それでも、最近ようやく後期古墳(七世紀から八世紀の古墳)とその終末に関する研究がすすめられようとしている。それでもなお、

平安時代の墓制、特に十世紀から十一世紀にかけての時期以降の研究は見られない。むしろ、歴史学（文献史学）の方からの問題にたいする接近が見られ、わが国の墓制、葬送にきわめて重要な位置を占める。そして、現代の日本人の霊魂観に大きな影響を与えた平安時代の葬送・墓制が無視されていることは残念でならない。今後、大いに研究されなければならない分野であると記しておられる。

田中久夫氏が指摘されるように、たしかに日本の考古学は、縄文・弥生時代の墳墓や、古墳時代の名称が代表しているように、全国各地に所在する古墳の調査・研究に関心が寄せられ、多大の成果が積み上げられて来た。

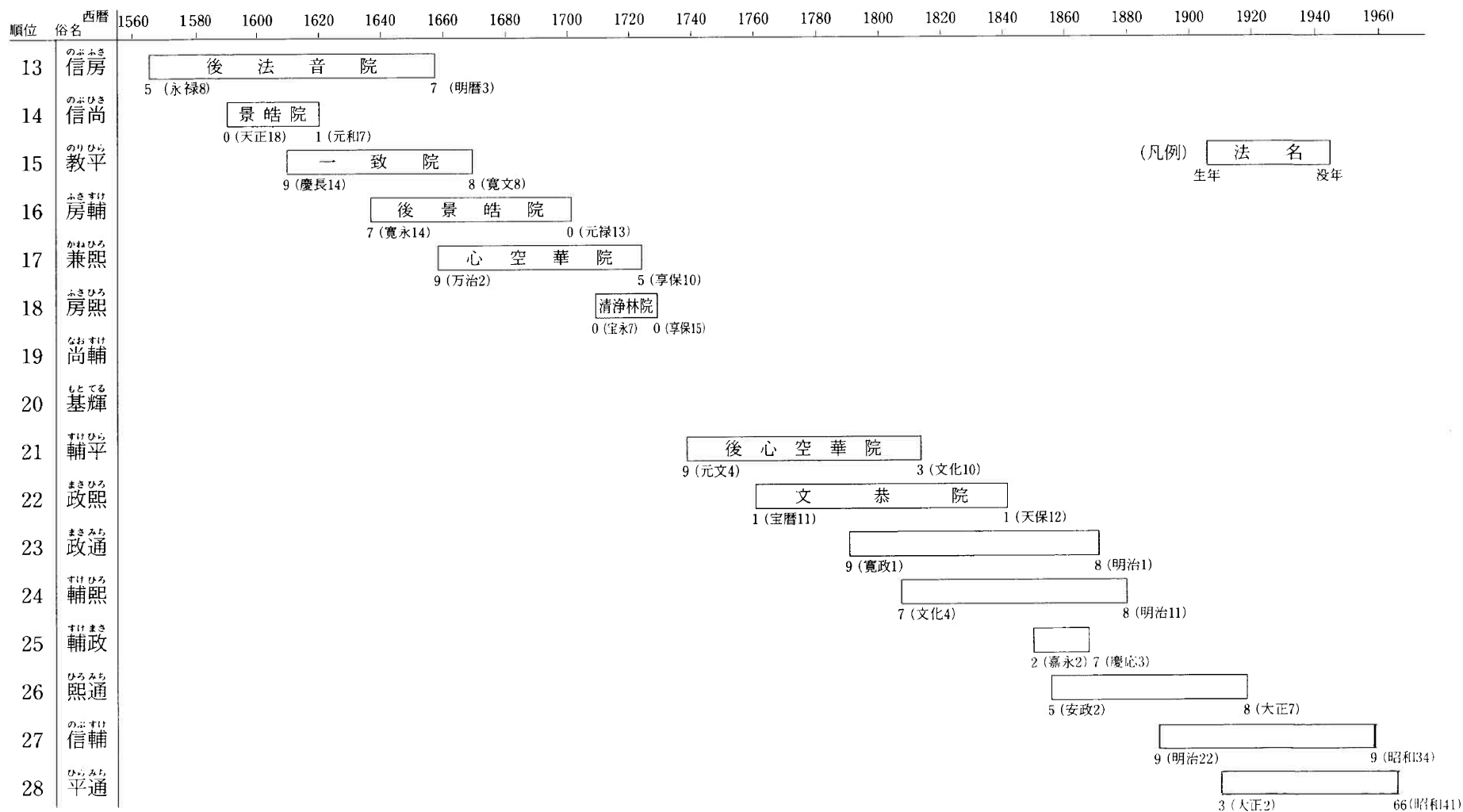
しかし、奈良・平安時代、さらに鎌倉・室町時代というように、時代が下がって行くに従って関心が薄らいで行っていることは確かであろう。

本稿の冒頭で述べたように、中世・近世の考古学は、あらゆる分野においてさかんになる趨勢にはあるが、全国各地の発掘調査によって検出されている墓地の遺跡、遺構の研究と共に、現存している墓地・墓塔・墓碑の調査が必要である。というのが私の持論である。従来、金石文や石造美術の対象とされて来たものも、墓制の上から見直すことも大切であるし、前稿で取り上げた大名家や、本稿で取り上げた公家の墓所のように、各地に存在し、手近かに調査することのできるものを一カ所ずつ記録して行くことも一つの研究の方向であると思う。

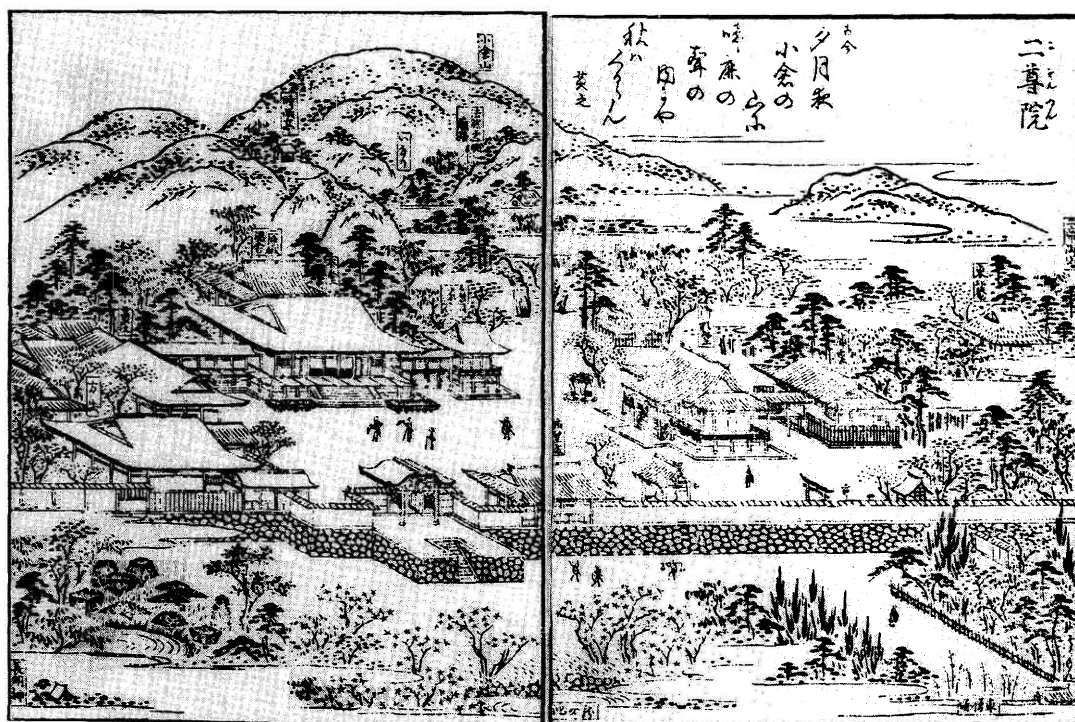
前稿以後も機会あるごとに各地に所在する大名家墓所や、さまざまな遺例に接して来たが、そのたびごとにいくつかの課題がひそんでいることに気付いているのである。今すこし、各地に所在する大名家墓所・公家墓所等を訪ね、現状調査を進めた上で、小論を展開することにした。

鷹司家に関する史料の調査は、昭和五十二年当時、川勝政太郎先生のゼミであった八期生の古賀（旧姓、塩見）純子さんに手伝ってもらったが、その時にまとめてくれていた資料を今回使用した。また墓所の調査には、浜田幸司君（現在、寝屋川市教育委員会文化財担当職員）の協力を得た。記して謝意を表しておきたい。

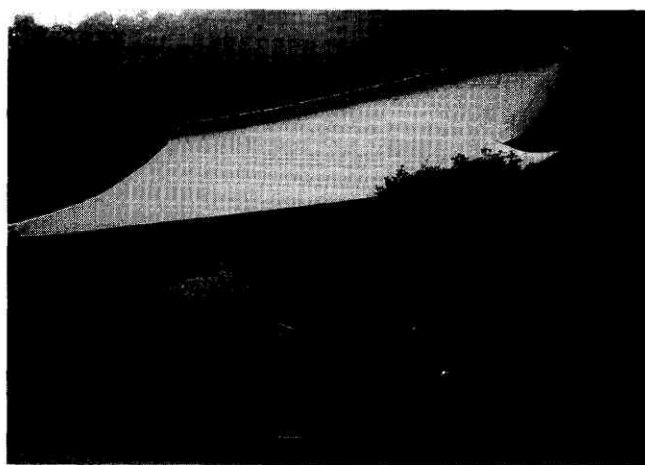
鷹司家歴代年数表



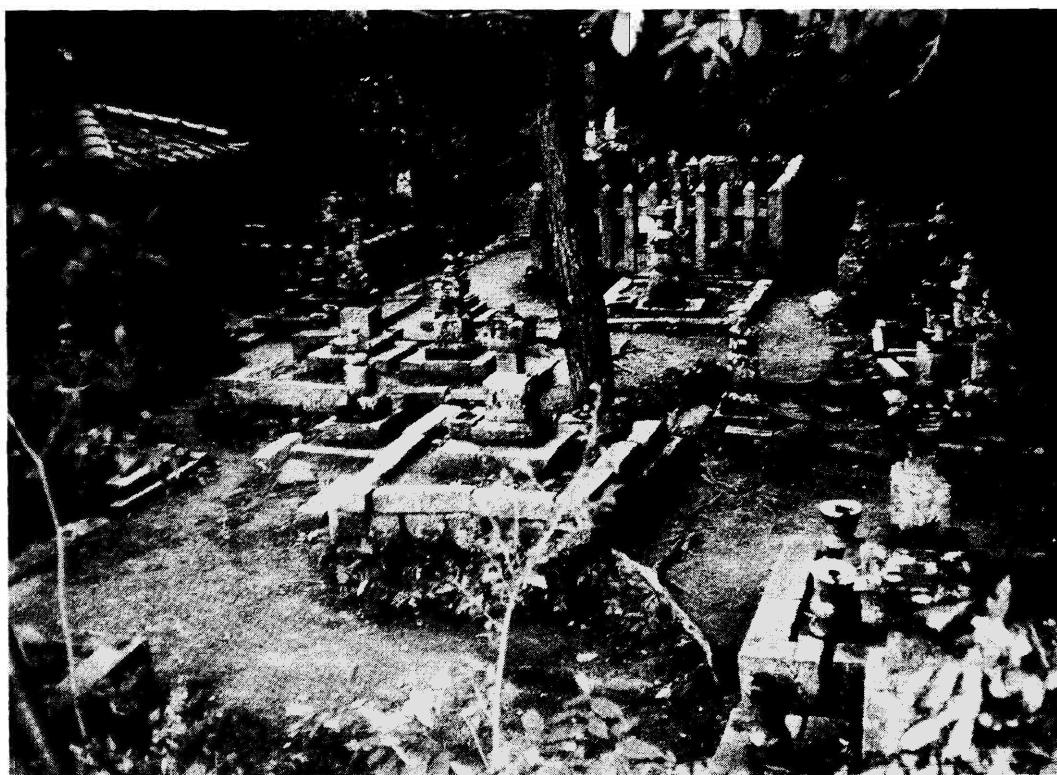
近世公家墓所の一例



第1図 『都名所図会』に描かれた二尊院(角川文庫より)



第2図 上一二尊院山門、下一同 本堂



第3図 鷹司家墓所全景(上一南方より、下一北方より)



第4図 上一鷹司信房墓塔(左側)、下一鷹司房照墓塔(右前)



第5図 上一高政院墓塔、下一願證院墓塔



第6図 鷹司房輔霊屋と墓塔

(上右—霊屋の内部
 上左—霊屋の内部
 下右—正面
 下左—背面)